

教員名	SCHWARTZ LAURE (SCHWARTZ LAURE)
所 属	比較日本学研究センター
学 位	博士
職 名	助教授
URL/E-mail	http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/ / schwartz@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

美術史 / 仏教 / 美術館

◆主要業績

総数 (3) 件

- 「フランスにおける日本美術史研究の起源と発展についての一考察」『お茶の水女子大学比較日本学研究センター年報』、創刊号 2005 年
- 「フランスにおける日本仏教美術研究への概観 その誕生と発展」、『日仏図書館情報研究』31号、2005.年

◆研究内容

2005 年度は、教育活動や比較日本学研究センターでの活動と平行して、ヨーロッパにおける日本美術史への関心及び日本美術史研究を追究してきた。特に仏教美術研究の誕生に立ち返り、この分野における先駆的な行動をした学者らの役割に着目し、また仏教美術品の評価と分析の基となった様々な文化的背景（東洋学研究の伝統、ジャポニズム、比較研究、百科事典的精神、最初の極東美術館の誕生など）の中に、そういった作品の発見を置き直した。

また、博士論文でテーマにした平安時代の傑作「応徳涅槃図」（高野山霊宝館所蔵）の研究を続け、星辰信仰や陰陽道信仰と密接に関わった当時の風潮とこの絵画との関係性を明らかにするための解釈を深めた。

◆教育内容

授業では、日本美術に対する考え方を歴史的に概観しながら、同時に現代の海外の日本学者、特に活発な欧米、アジアの日本学研究とその成果について、できるだけ網羅的に紹介するよう努めている。

セミナーでは、1908 年パリで出版された『日本にて - 美術の聖域へのプロムナード - 』の講読を主に行っている。著者、ガストン・ミジョン(1861-1930)は、1893 年よりルーブル美術館初の極東美術コレクション展示室開設を推進した学芸員である。著名な美術品蒐集家であり日本美術愛好家であったミジョンは、今から 100 年前の 1906 年に任務で訪れた日本の建造物、美術館、名所、庭園、寺といった様々な場所について、本著で詳しく解説しており、取り上げられているテーマの多様性、その批判的アプローチ、そして著者ミジョン自身、当時の最も著名な日本美術愛好家と親交があったということからも、日本でほとんど知られていないこの本は、セミナーのテーマにとっても意義深いものである。

◆Research Pursuits

Parallel to my activities within the Center of Japanese Comparative Studies, I have concentrated my research on the history of the studies related to the appreciation of Japanese Art in Europe. Going back to the origin of several researches, particularly in the field of Buddhist Art, I insisted on the role of some Europeans scholars pioneers in that domain and I attempted to situate the discovery of the Buddhist works within the different contexts, knowledge and cultural circumstances (such oriental tradition, Japonism, comparatives methods, encyclopedic approach, first extreme-oriental art museums) having influenced western specialists in their evaluation and analyze.

Besides, continuing my research on the *Ôtoku nehan zu*, masterpiece of the Heian Period preserved at the Reihôkan Museum (Mount Kôya), I tried to develop my interpretation intending to show how this Buddhist Painting could have been connected with the *Onmyô-dô* and astrological beliefs.

◆共同研究例

お茶の水女子大学比較日本学研究センター (2004-2006)

プロジェクト名：欧米における日本学 ―日本美術研究を中心に―

趣旨：欧米における日本美術研究に関する方法論の分析的考察を行う。欧米の研究者あるいは芸術家がどのように日本の美術を解釈してきたかを明らかにしながら、彼らの残した言説（内容、文化的背景、方法論）を分析し、日本国内での研究と比較しながら検討し、その特質を捉える。

◆将来の研究計画・研究の展望

ヨーロッパにおける日本美術史の誕生についての研究では、ガストン・ミジョンが 1893 年にルーブル美術館へ初めて日本美術コレクションを導入した目的とその段階を明らかにしていく。今日ではほとんど知られていないが、日本美術研究史の中で中心的な役割を果たしたこの人物の功績に着目し、日仏文化交流における重要な局面を明らかにしていく。また、「応徳涅槃図」に関する研究を発展させ、その現段階を発表し、この作品を占星術と陰陽道に結びつけた新しい見方の下に捉えなおしていく。

◆共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ

ヨーロッパにおける日本美術史の誕生と発展、とりわけ日本美術コレクションの現状と分析、またこれらがヨーロッパの主要な美術館に導入され、保存され、研究され、展示された方法等は、国内外での共同研究の対象となり得るテーマであり、また大学教員や学芸員の協力を前提とする研究テーマである。

◆受験生等へのメッセージ

2004 年 6 月にお茶の水女子大学比較日本学研究センター助教授に着任して以来、フランス人研究者としての日本美術史に対する考察を伝え、大学や美術館での研究・勤務経験を生かして、お茶の水女子大学の国際学術交流に貢献できることは大変光栄である。講義や、比較日本学研究センターが主催する国内外での様々な活動（講演会、セミナー、シンポジウム、出版）を通して、海外で力強く発展し続ける日本学に接し、学生が研究テーマを発見し、これを深めていけるように促していきたい。日本美術に関する海外の文献の紹介と解説、海外の主要な日本学研究施設の訪問、講義や比較日本学研究センター主催の国際セミナー等は、我々の目的とするところであり、関心のある学生と共に追究していきたいと願っている。

◆Educational Pursuits

Devoted to the presentation of the historical development of Japanese Studies Overseas my teaching program intends to introduce and analyze the birth and development of Japanese Art History over the world, particularly in Europe and America.

During the previous years, our courses focalized on the study of the Book [In Japan. Pilgrimages to the Shrines of Art] published in Paris in 1908. His author, Gaston Migeon (1861-1930), Curator in the Department of Decorative Arts of the Louvre Museum, was the first to introduce in 1893, Far Eastern Art collections within this prestigious institution. By describing in detail, with a critical approach many historical places like museums, gardens and temples, this book almost unknown in Japan allows us to examine how, just one hundred years ago, Western people, in particular in Europe, considered and interpreted Japanese culture.